「Bunri Creative Award 2022 << 高校生対象 >> 地域のためのメディア創造コンペティション」実施報告

― 高校生向け情報メディアコンテスト開催の成果と意義 ―

"Bunri Creative Award 2022 for High School Students Media Creation Competition for Local Communities"

― Achievements and Significance of the Information Media Contest for High School Students ―

世良　　清
Kiyoshi Sera

概要：高大連携は喫緊の重要課題である。その一環として、本学ではこれまでも情報メディア学科で高校生向けのコンテスが実施されてきたが、2022年度からは学内の実施体制を地域連携センターに移して「Bunri Creative Award 2022 << 高校生対象 >> 地域のためのメディア創造コンペティション」が実施されることになった。本稿では、筆者の体験をもとに、高校教員からヒアリングを行い、企画運営した事例を報告し、その成果と意義を考察した。

Abstract：Cooperation between high schools and universities is an urgent and important issue. As part of this effort, the Department of Information and Media Studies has been holding contests for high school students, but from the 2022 academic year, we have decided to transfer the on-campus implementation system to the Community Cooperation Center. In this report, we report on the planning and operation of the "Bunri Creative Award 2022 Media Creation Competition for High School Students" and discuss the results and significance of the event.

キーワード：高大連携、高校生コンテスト、情報システム部門、メディア表現部門、スピーチ部門、公開審査

Keywords: high school-university collaboration, high school student contest, information systems division, media expression division, speech section, public examination

１．はじめに

筆者は、本学着任前の高校教諭の時代に、2020年度に実施された本学高校生向けコンテスト1）を始め、他大学主催、行政や企業など様々な主催者によるコンテスト等に応募してきた経緯がある。そのなかには上位入賞したコンテストもあり、一方、応募しても何の返答もないまま過ぎていったコンテストもあった。

これら経緯を反映し、2022年度には、地域連携センター運営委員会を中心にコンテスト運営に携わることになり、筆者は、参加した高校生にも、あるいは、指導教員にも、さらには応募を受ける本学側にも満足感の残るコンテストとなるようにと、2021年6月から2022年5月にかけて、愛知・岐阜・三重県に所在する約50高校を訪問し、情報教育の担当教諭のほか、各種部活動顧問教諭、教務主任、校長・教頭らにヒアリングを行った。その際に収集した課題を顕在化（図１）するとともに改善策を検討して「Bunri Creative Award 2022 << 高校生対象 >> 地域のためのメディア創造コンペティション」の実施を企画した。

（2023年10月2日受付，2023年11月28日受理 ）

図１　高校生コンテストへの高校ヒアリング

・多くのコンテストの締切日は、8月末から10月頃に集中している。これは、夏期休業中に作業することを前提にしていると想定されるが、多数のコンテストが輻輳しているため、応募先を見極めて選出しなければならない。
・高校卒業後に就職する生徒や、推薦・AO 入試などにより、進学する3年生は、進路決定後、卒業までの期間が長く、学習目標を見失いやすいので、12月から1月頃に締切日を設定したコンテストへの需要は大きい。
・1・2年生徒には、進路指導に活用できる実績となると有り難い。
・応募しても、予選を通過し、あるいは入賞した者にのみ通知があり、予選で落選し入賞しない応募者は放置される。あるいは、本選が終わった後に、形式的な報告書が届くだけである。
・結果が届くのが、3年生の卒業式後では、連絡が取れないことがある。
・表彰式などに参加する交通費は、高校側からは公式的な行事以外は支出されないので、生徒の自己負担となる。
・審査の過程が見えない。評価点が不明瞭である。
・映画作品を応募する機会が少ない。また、高校生が出演する作品の公開には、生徒の個人情報保護の観点から、作品が広く公開されるコンテストには応募を躊躇する。

図2　ヒアリングにより抽出された課題改善

・遠方からの交通費負担をなくすため、オンライン開催を併用する。
・オンラインでの開催については、関係者に限定する。
・公開審査、表彰式は２月中に完了させる。
・稲沢市、稲沢市教育委員会から後援名義の使用許可、賞状・副賞の提供を受ける
・地域の団体との連携を図る。
・上位の賞だけではなく、奨励賞や特別賞を用意し、応募した高校生全員に目を向ける。
・新聞社から後援名義の使用、賞状の提供、紙面への掲載
・公開審査の実施
・外部審査員（新聞社、県立高校、青年会議所など）、学生審査員の登用
・各高校 WEB への掲載依頼
・出前表彰式の実施　（遠方を除く）

これらのヒアリング内容から課題を抽出し、改善策を企画に反映させることにした。

ヒアリングにより抽出された課題を改善（図2）して、開催要項の骨子（図3）を取りまとめた。応募期限は、冬期休業が終わり、1月の授業開始1週後とし、その後1週間程度で、予選結果の通知、2月に公開審査会を実施し、表彰状等は卒業式に間に合うように届けることとした。また、高校に表彰状等を届ける際には、高校長の理解が得られれば、校長室に本学から教員が出向き、出前

図3　開催要項の骨子

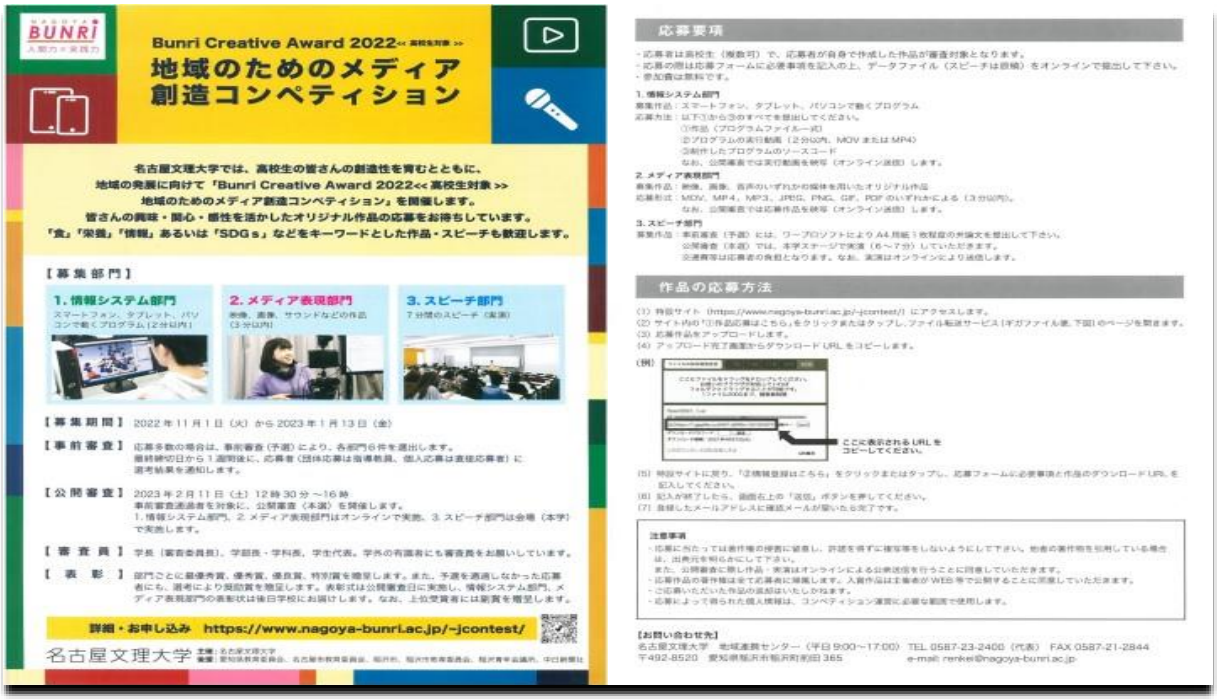
Bunri Creative Award 2022
<<高校生対象>>
地域のためのメディア創造コンペティション

【公開審査】 日時：2月11日（土）　開会　12：30　　閉会　16：00
（受付 11:30～12:05）
【場所】 名古屋文理大学　本館　ソフィアホール
【実施方法】 オンライン（情報システム部門、メディア表現部門）と、
会場実施（スピーチ部門）のハイブリッド実施。

【主催】 名古屋文理大学
【後援】 愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、
稲沢市、稲沢市教育委員会、
（一社）稲沢青年会議所、中日新聞

NAGOYA BUNRI

図4　2022年度の案内書



表彰式を行い、各地域の報道機関に情報提供することによって、新聞紙面に記事として取り上げられるように工夫した。

2．高校への参加の働きかけ

本学 WEB ページよる広報[2)]、入試広報・学事課や情報メディア学科教員による高校訪問での案内や、オープンキャンパスへの参加高校生への案内、さらには、新聞への募集記事掲載など、様々なアプローチによって広報に努めた。案内書（図4）を一新して、情報科担当教員のほか、放送部や映画部などの部活動にターゲットをあて、指導担当教員に直接アプローチし、作品制作や応募の手順などをアドバイスするなど、高校側の目線に即した対応を行った。

3．コンテスト公開審査の運営

本学の年間日程の中で､高校生コンテストの開催日は、大学入学共通テスト後が適切であり、高校3年生にとっては多くの高校で、卒業式前の自宅学習期間であることを考慮して、2月11日（土）に設定した。しかしこの時期は、降雪も懸念され、遠方からの応募者に配慮して、①情報システム部門と、②メディア表現部門は、ZOOM を使用してオンライン開催、③スピーチ部門は会場開催と、ハイブリッド開催とすることにした。スピーチ部門を会場開催としたのは、2024年に岐阜県で全国高等学校総合文化祭が実施されることとなっており、筆者は岐阜県高等学校文化連盟弁論部門に協力しており、要望もあって、参加した高校生に臨場感を体験する機会を設ける目的があった。

当日は、景山節学長（図5）、長谷川聡副学長・情報メディア学部長・地域連携センター長を始め、櫻井雅子客員教授、地域連携センター運営委員会委員・職員に参画していただき、また、情報メディア学科学生からも運営スタッフとして起用した。

図5　景山学長による開会挨拶

公開審査当日は、地域連携センターで受け付けを行い、ソフィアホールを会場として実施した。スピーチ部門に出場した高校生は､練習に余念がなく（図６）､また、他の2部門に参加する高校生は、ZOOM によりオンラインで参加した。

図6　スピーチ部門のリハーサル風景

図7　スピーチ部門の発表風景

しかし、運営方法が複雑であったことにより、スタッフ間の連絡調整不足や、オンラインの障害等により、進行上に混乱が生じた。これは紛れもない事実であり、今後への改善策を共有しておく必要がある。

4．審査結果

愛知、岐阜、三重の3県を中心に、長野県、茨城県の高校9校から総数35件の応募があり、事前審査（予選）[3)]を通過した情報システム部門3作品、メディア表現部門9作品、スピーチ部門5名を対象に、公開審査[4)]を、２月11日（土）、本学本館ソフィアホールで開催（図７）した。

審査には先に述べた外部審査員と内部審査員の9名に尽力いただいた（図８）。

各部門とも、熱心に準備し、制作された作品が多く、高校生の目線で自らの考えを盛り込んだもの、地域の紹介や課題を取り上げたもの、ほのぼのとした作品など、実に多彩な作品･スピーチが集まった。どの作品･スピーチも甲乙つけがたい状況のなかで、審査は本学学長、学部長のほか、高校や地域の観点を取り入れるため、学外審査員として、県立高校長、情報科教諭、稲沢青年会議所、中日新聞一宮総局から、有識者の皆様をお招きし、さらに若い感性も取り入れるため本学学生から、男性１名女性１名が審査員に加わり、厳正に執り行った。

とりわけスピーチ部門は、高校生が自分の言葉で熱い思いを熱く語る姿に聴衆が聞き入り、「弁論は7分間の言葉の芸術」と呼ばれるように、参加者一同、感動する場面が見られた。

その結果、各部門の入賞者（図９）が決定し、学長表彰状とともに、最優秀賞には稲沢市長賞（図10）が、優秀賞には稲沢市教育委員会賞（図11）が授与され、さらに優良賞までには中日新聞社賞が併せて授与された。また、熱心に活動をされた学校・個人に特別賞、奨励賞を贈呈した。

表彰は、会場で実施したほか、長谷川副学長と共に各校を訪問し、校長室で出前表彰式を行った。その状況は複数の高校の WEB ページで公開されている。さらには多くの高校では、校長によって全校集会などの場で伝達表彰が行われた。

また、各地域の新聞社などに事前に情報提供を行ったことにより、地域版に記事として掲載された。これは、本学の広報になるだけでなく、高校にとっても、学校が

図8　審査員名簿

【外部審査員】（順不同）

愛知県立岡崎商業高等学校　校長	加藤　千景　様
愛知県立一宮高等学校　情報科教諭	鈴木　淳子　様
（一社）稲沢青年会議所　副理事長・専務理事	大野　紀之　様
中日新聞　一宮総局　総局長	渡部　　圭　様

【内部審査員】（敬称略）

名古屋文理大学　学長	景山　　節
名古屋文理大学　副学長・情報メディア学部長・教授	長谷川　聡
名古屋文理大学　情報メディア学部　客員教授	櫻井　雅子
名古屋文理大学　情報メディア学部　学生	野村　侑暉
同　　上	中澤　雅子

図9　入賞者一覧

（注：入賞者の個人名は省略）

【情報システム部門】
最優秀賞（学長賞、稲沢市長賞、中日新聞社賞）
「Change Ring」　UWC ISAK Japan
優秀賞（学長賞、稲沢市教育委員会賞、中日新聞社賞）
「デバイス・タッチレス・ソフトウェア制御プログラム」茨城県立水戸工業高等学校
優良賞（学長賞、中日新聞社賞）
「教室の換気方法を考える」愛知県立名古屋西高等学校
【メディア表現部門】
最優秀賞（学長賞、稲沢市長賞、中日新聞社賞）
「ゆでたまご研究会」　岐阜県立岐南工業高等学校
優秀賞（学長賞、稲沢市教育委員会賞、中日新聞社賞）
「生きる」　三重県立神戸高等学校
優良賞（学長賞、中日新聞社賞）
「おたすけ戦隊カラフルマン！」愛知県立尾西高等学校
「最近の社会・若者社会」愛知県立尾西高等学校
「冬」名古屋女子大学高等学校
「海」名古屋女子大学高等学校
「こだまでしょうか」　名古屋女子大学高等学校
「『自分を見失いそうになった日』より」名古屋女子大学高等学校
「岐阜の文化」岐阜県立岐阜各務野高等学校
【スピーチ部門】
最優秀賞（学長賞、稲沢市長賞、中日新聞社賞）
「青春の代名詞」岐阜県立加納高等学校
優秀賞（学長賞、稲沢市教育委員会賞、中日新聞社賞）
「新たな人生の光」岐阜県立岐南工業高等学校
優良賞（学長賞、中日新聞社賞）
「思い出があたたかくなるように」岐阜県立加納高等学校
「未来につなげたい大事なもの」三重県立神戸高等学校
【奨励賞】（学長賞）
「カワウソカフェにいってみた」愛知県立尾西高等学校
「電気火災に気を付けよう！」「尾西高校」愛知県立尾西高等学校
「尾西高校作ってみた」愛知県立尾西高等学校
「I LOVE Anime ！」　岐阜県立岐阜各務野高等学校
「清流とのつながり」　岐阜県立岐阜各務野高等学校
「水明」　岐阜県立岐阜各務野高等学校
「創造の海」　岐阜県立岐阜各務野高等学校
【特別賞】（学長賞）　愛知県立尾西高等学校

図10　稲沢市長賞

稲沢市長賞
情報システム部門
UWC ISAK Japan
様
あなたは「Bunri Creative Award 2022（高校生対象）地域のためのメディア創造コンペティション」において優秀な成績をおさめられましたのでこれを賞し稲沢市長賞を授与します
令和5年2月11日
稲沢市長
加藤　錠司郎

図11　稲沢市教育委員会賞

稲沢市教育委員会賞
メディア表現部門
三重県立神戸高等学校
三重県立神戸高等学校放送部　様
あなたがたは「Bunri Creative Award 2022（高校生対象）地域のためのメディア創造コンペティション」において優秀な成績をおさめられましたのでこれを賞し稲沢市教育委員会賞を授与します
令和5年2月11日
稲沢市教育委員会

図12　特別賞

NAGOYA BUNRI

特 別 賞

愛知県立尾西高等学校

あなたがたは Bunri Creative Award 2022 <<高校生対象>> 地域のためのメディア創造コンペティションにおいて熱心な活動が認められましたので ここに特別賞を贈ります

令和５年2月11日

名古屋文理大学 学長 景山 節

所在する地域への広報になり好評を得た。また、多数の応募があった愛知県立尾西高等学校に贈った特別賞（図12）は、現在も高校の玄関付近に掲出されている。

５．まとめ

「Bunri Creative Award 2022 << 高校生対象 >> 地域のためのメディア創造コンペティション」では、高校生らが集い、交流の場を生み出すことができた（図13）のは、オープンキャンパスとは異なり、本学にとって大きな財産と言える。しかし初めての試みを多数取り入れて複雑化したことにより、混乱が生じたのは、偏に筆者の責任である。この場を借りて関係の皆様には改めてお詫び申し上げる。

図13　表彰後の集合写真

ところで、高校生コンテストを大学が主催する意義を考えてみたい。高校生を対象としたコンテストは、全国高等学校総合文化祭など、文部科学省や都道府県教育委員会などの教育行政が実施するもの、各種公益法人や民間企業が実施するものなど多岐にわたる。しかし、ヒアリングを進める中で、高校教育現場の目線で実施されているとはいえないコンテストも少なくないことがわかった。

こうした状況の下、高校生にとっていかに有意義なコンテストを創生するために考えることが重要になる。それは、単に作品の成果を評価するだけに留まらず、高校生がひたむきに努力した経過が正しく評価される機会を設けるのは本学の地域貢献と言える。さらには、高校教員が指導した成果が評価される機会を提供することが重要であると筆者は考えている。高校教員と強い絆を築き、信頼を得ることが、高大連携、さらには今後の高大接続に結びつくといえるのではなかろうか。

2023年度は、健康生活学部、情報メディア学部の2部門による「Bunri Creative Award 2023 地域創造のための高校生コンテスト」として開催が決まっている。参加高校の拡がりにより、愛知県教育委員会のほか、岐阜県、三重県教育委員会の後援名義の許可も得た。多くの大学主催の高校生向けコンテストが輻輳するなか、高校生や高校教員に選ばれる魅力的なコンテストとして永続することを願ってやまない。

本稿執筆にあたり、関係の皆様にご助言をいただいたことに厚く御礼申し上げる。なお、利益相反に関して開示すべき COI 状態はない

本稿に使用した写真は、被撮影者の了解を得たものであり、本学 WEB ページにも掲載している。

本稿は、令和４年度名古屋文理大学ＦＤ・ＳＤフォーラムにおける報告（2023）、及び日本教育学会第81回大会（2023.8.24、広島大学からオンライン開催）における口頭発表[5] を基に再構成したものである。

参考・引用文献

1)　名古屋文理大学「高校生コンテスト入賞者決定」（2021.4.8）
https://www.nagoya-bunri.ac.jp/news/post-1673/
（2023.10.1 最終確認）

2)　名古屋文理大学「『Bunri Creative Award 2022≪高校生対象≫地域のためのメディア創造コンペティション』の募集が始まりました」（2022.11.2）
https://www.nagoya-bunri.ac.jp/news/post-8770/
（2023.10.1 最終確認）

3)　名古屋文理大学「Bunri Creative Award 2022<< 高校生対象 >> 地域のためのメディア創造コンペティション事前審査発表」（2022.2.6）
https://www.nagoya-bunri.ac.jp/news/post-10464/
（2023.10.1 最終確認）

4)　名古屋文理大学「Bunri Creative Award 2022<< 高校生対象 >> 地域のためのメディア創造コンペティ

ション最終結果発表」（2023．2．21）
https://www.nagoya-bunri.ac.jp/news/post-10642/
（2023.10.1 最終確認）

5） 世良清「高校生向け情報メディアコンテスト開催の成果と意義　－「Bunri Creative Award 2022 << 高校生対象 >> 地域のためのメディア創造コンペティション」をめぐってー」、日本教育学会第81回大会、2023